

# 響

ウル リム (響)

第11号

1999年5月20日発行

題字：康秀峰

## 同労者との旅

小林 史明

2年前、同じ九州教区で働く太田執事（菊池黎明教会牧師補）と10日間聖地旅行をしました。

彼は熊本郊外にあるハンセン病療養所の療養者です。しかし、毎年目の不自由な人たちとのツアーをやってる作家もいることだし、どこかに足の弱い執事も安心して参加できるツアーがあるだろう、と思って気楽に考えていました。

ところがこの人、普通じゃないんです。旅行するにあたり3つの希望がある、それは、

- ①エルサレムの城壁の上を歩きたい。
- ②復活したイエス様が弟子たちに現れたエマオに行つて聖餐式をしたい。
- ③羊たちと一緒に写真を撮りたい。

しかも、これを30万円以内でやってくれ、と言い出したのです。

こんな希望を叶えてくれるツアーなんかないので、安い航空券を手に入れたり、考古学の本を読み漁らなければならなくなりました。そして準備を整えて出発したのですが、最初の3日はトラブル続き。平らな城壁と思っていたら、暗くて細い急な階段を上り下りしなければなりません。私は「これぐらい歩いてくれたっていいじゃないか」とイライラするし、彼は「ちょっとくらい休ませてくれ」と思っているのですが、予想もしない展開にパニックで言葉も出ませんでした。こんな気持ちの行き違いが、翌日のエマオ訪問時にも起きまして、私は自分が情けなくなつてしまいました。

私は自分で言うのもおかしな話ですが、人に

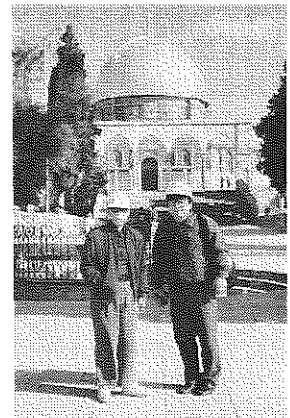
は親切な方だと思っていましたが、障害を持った人と実際に寝食を共にすると、善人ぶつた自分の仮面が剥がれてしまいました。

歴史的に3箇所の説があるエマオの全部を訪ねた後、私たちは気まずい心境を解消するために、ひとつの決断をしました。私もエルサレムまで来て、ユダヤ教の本など面白いものを漁る日がほしいし、彼も2日間の疲れをいやして、2日後から始まるツアー（現地集合の日本語によるイスラエル一周の旅）に備えたいので、翌日を自由行動の日にしました。

結果的にはそれが良かったのだろうと思います。「障害者の彼のために私が奉仕するんだ。」という意識では、お互いを苦しめてしまいます。「それぞれやりたい事があって、聖地に来たんだ。ただ、彼だけではできないことだけ、私が手伝えればいいんだ。自分が楽しまないでいて、相手が楽しいはずがない。」そんな気持ちになれたのです。

そしてこの旅行以来、私も彼に負けずけ文句を言いながら、一緒に教育部で働いています。（こばやし・ふみあき 大分聖公会牧師）

神殿跡の黄金の  
ドーム前で記念撮影。



時のしるし

広島の高校校長の自殺がきっかけで、日の丸・君が代の法制化という問題が浮上した。

日の丸・君が代が最もよく利用されるのはスポーツ行事である。冬季オリンピックで、萩原が大きな日の丸の旗を振りながらゴールインしたのは数年前のことだった。ジャンプ陣が好成績を取ると、新聞の見出しは決まって「日の丸飛行隊」となる。応援席には激励の言葉を寄せ書きした日の丸の旗が掲げられる。しかし、このような光景や表現に違和感や抵抗をもつ人はごく少数である。当の選手たちも何の抵抗もなくそれを受け入れている。数年前ある球技の中学生全国大会の開会式に出席した時、国旗掲揚・国歌斉唱があり、沖縄県チームの面々が直立不動で歌っているのには驚いた。

日の丸・君が代に関する議論は、国旗や国歌自体が必要なかどうか、必要としても法制化するべきことなのかどうか、国旗国歌として定めるのなら、それは日の丸・君が代でいいのか、それとも別のものにすべきなのかという議論になるだろう。とにかく今、私たちにこのことに十分な議論が求められている。しかし、議論のためには、主体形成によって確固たる意見をもつことが求められる。無関心であったり「別にどちらでもいい」と思うのは、議論にならないばかりか、自動的に法制化推進の側につくことになる。私自身も、日々、大阪市内の大きなビルの屋上に掲げられた日の丸や、子ども達の音楽の教科書の後ろにさりげなく載せられた君が代の楽譜に抵抗を感じながらも、日常の生活に埋没し、問題意識を失いつつあった。

日の丸・君が代が国旗国歌としてふさわしくない理由は次の二点である。

第一に、日の丸・君が代は、上から押しつけられたものであって、下からのものではない。星条旗やユニオンジャックは、市民革命や独立運動の時に、シンボルとして掲げられたものであり、そのまま民主主義のシンボルでもあった。しかし、日の丸や君が代はそう

いう成り立ちではないことは明らかである。まして、君が代は天皇礼賛の詩である。古歌の原意はそうでないにせよ、明らかに大日本帝国の時代に「君」は天皇をさして歌われてきたのである。

第二に、日の丸・君が代により、アジア・太平洋戦争でアジアの多数の人々に犠牲を強いた事実である。これから将来、日本がアジアの一員として共に生きていく以上、かつて一度でもその国の人々を苦しめた旗や歌を、シンボルとして持ち続けていくわけにはいかない。しかも、他国だけでなく、自国である沖縄の人々をもこの旗と歌のもとに苦しめた。その歴史をもつ以上、この旗や歌が、国旗や国歌としてふさわしくないことは当然である。

この二点がまず思うことである。しかし、そうであってもそうでなくても、最大の問題点は、日の丸・君が代の教育現場への押しつけが公然と行われていることである。学習指導要領においてははっきりと強制が明言されている。そして、学校管理職には日の丸・君が代が踏み絵となっている。これは、明らかに憲法違反である。仮に法制化されたところで、こうした強制はあってはならないのに、今すでに、あってはならないことが教育現場で現実起こっている。これに、私たちは憤りを覚えなければならない。

聖公会に目を転じれば、毎日曜日に用いている古今聖歌集には、ある主教が「キリスト教会の君が代」と称賛した「わがやまのくにをまもり」(506番)がある。賛美歌にもあるこの歌を日本基督教団は数年前に削除した。祈祷書から「天皇のための祈り」を削除した日本聖公会も、戦前戦中の戦勝祈祷会などで必ずといってよいほど歌われたこの歌について、議論をしているのだろうか。日本聖公会の信徒にとっては、日の丸・君が代と密着した教派の歴史や体質を直視することもまた求められているといえよう。

(まつやま・けん 京都聖ステパノ教会信徒)

◆◆◆

「日の丸・君が代の法制化」と聖公会

松山 献

◆◆◆

精神障害者作業所職員として

芦田 邦子

生野区の西隣の天王寺区にある精神障害者小規模作業所の職員として働き、メンバー(当事者)と共に歩んで早5年。

作業所といえども、そこは人が20名近く集まる小さな社会。いろんな個性、年齢の人がいる。そこで共通しているのは、お互いに精神疾患と呼ばれる障害をもっていることだけ。だから安心しあえるし、支えあいもできる。「幻聴がまた聞こえる」「昨日は寝られなかった」「明日は通院です」「イライラする!」「頭が痛い」そんな言葉のやりとりが自然にできる。別に作業所の中で誰を気にすることはない。この自然にできる“場”がとてもメンバーさんにはよいらしい。

作業所の中では、内職作業や他の場所へ出かけての清掃作業がある。「作業がある方がいい」と言って、いっしょうけんめい黙々とする人がいれば、しゃべってばかりの人もある。寝ている人もいる。声を掛けてみるが、「もうちょっと寝るワ!」それもいい。そこがいい。

リクレーション、月に一度のその日は、彼にとって休日。「休みます」「今度行くところもおもしろいで!」と、さそってはみるが「しんどいね」と断られる。「じゃ、又今度行こな!」

ボランティアさんや地域の人たちが、どんどん作業所に入ってくる。「近所の人、いるかもしれん」「昔、近所の人に苦しめられた」でも時代は変わったし、来てくれはる人を信じたい。信じなければ前に進まないと思ふ。

二週間に一度の調理実習。二十名ちかくなるので作るものが限られる。カレー、シチュー。お好み焼、焼ソバ、鉄板焼。ちゃんこなべ、鳥ナベ、「みんなで食べるとおいしいネ」「もっと残ってるヨ。食べよーな」「もうおなかいっぱい!」最後まで食べているのは職員だけ。

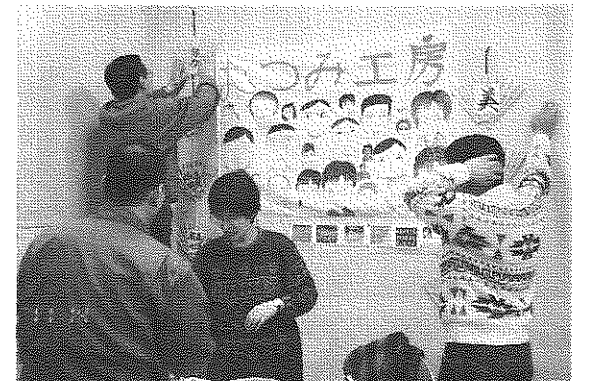
こんな日常の繰り返しの5年間。  
「作業所に、通えば、病気が治る!」「エッ。そんなことはない」「作業所にきたから病気が治った」「エッ。!?」作業所は病院でもなければ、魔法の館でもない、ましてやそこにいる職員はただのおばさん。

職員として、メンバーさんと初めて向かい合った時「あー。マニュアルがほしい」と思った。でも今は時間がマニュアルだと思う。明日にしか分からないことがある。メンバーさんが、帰る時、「気つけて。また明日」と声を掛け合う。「また明日。明日もいい日でありますように」そんな思いでメンバーさんを見送る。

状態が悪くなると、イコール入院。そんな時代からやっと法律ができ、制度ができ、施設ができた。選ぶことができるこれが自由だと思う。「これ!」といえる自由、「いらない」といえる自由。「いっぱい選択肢があるといいよネ」これが最近の私の口ぐせ。

急ピッチで制度が変化し、職員は耳をダンボに、頭をシャッキリさせておかないと取り残されそう。でもメンバーさんと向かい合うときはボチボチといい顔でいたいと思う。

(あしだ・くにこ むつみ工房職員)



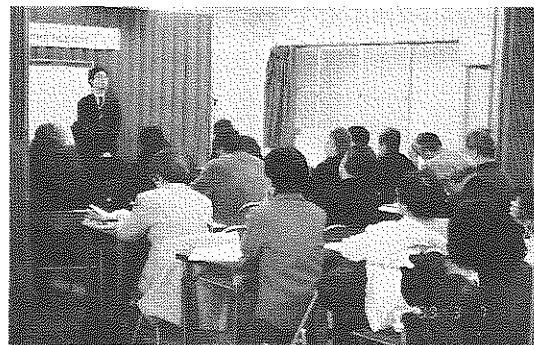
## 現代日本の歴史認識 —韓国・朝鮮の歴史と私たち—

藤永 壯

昨今、私たち朝鮮の近代史を研究する者は、教室や研究室の中だけにとどまっていられません。数年前から「日本の歴史教科書は自虐的だ」とか「日本軍慰安婦の強制連行はなかった」という議論が一部で主張されています。こうした社会の雰囲気の中で朝鮮近代史研究者として、言うべきことは言わなければならないという気持ちから、今日のようなテーマで文章を書いたり、人前で話をするようになりました。

**小淵首相の「富国強兵」** 小淵首相は「富国強兵」といふ言葉を、就任直後から好んで使っています。富国強兵というのは豊かな文化、徳の高い国をめざすということなのだそうですが、かつて明治政府が掲げた「富国強兵」というスローガンを連想させるような言葉を、今ことさら言い立てる理由は何なのでしょう？

富国強兵ということをもっと最初に言い出したのは、川勝平太さんという経済史の研究者で、1995年に『富国強兵論』という本を出しています。また川勝さんは、教科書攻撃をしている「新しい歴史教科書をつくる会」の賛同者でもあります。その内容について、川勝さんは今年の『文芸春秋』2月号に「富国強兵のすすめ」という題で、



1999.3.7 東豊中聖ミカエル教会

こんな風には書いています。「明治の指導者は、百年の大計として富国強兵を掲げた。その批判を現代の観点から行うのはたやすい。しかし、その国是のもとに、日本は、ほかのアジアのほとんどの地域が植民地になる中であって、ひとり政治的独立をまもり、かつ経済発展に成功した非西洋圏で唯一の国となった。それはアジア（東洋）史における奇跡であり、世界史に残る日本国民の偉業である」と。

このような議論はしばしば耳にするものですが、私は強い違和感をおぼえます。アジアのほかの地域との比較をもとに日本国民の優秀さを強調することは、アジアに対する優越感をつくりだし、結局のところアジア蔑視に行き着くと思うからです。私たちが過去を批判するのは、今日進むべき方向の指針を得るためです。過去を批判するのが簡単と言うのなら、無節操に過去を賛美するのも同じように簡単なことです。日本の近代化はアジアの犠牲の上に成り立っているものであり、安易な過去の賛美は、アジアの人々の気持ちを踏みにじることにつながりかねません。

**「華夷」意識と「帝国」の論理** また川勝さんの、日本はアジアや世界における文明の中心となるべきだという主張から連想されるのが、前近代の東アジア世界に見られた「華夷秩序」です。自分の国は文明の中心であり、周辺の国は遅れている、周りの国に優れた文明を伝えるのだという名目で、他民族を支配していくという構造がありました。これはもともと中華帝国が周辺民族を支配するための論理だったのですが、軍事力ではなく文明の力で他民族を服従させているという意識は、普遍的な「帝国」の論理と通じるところがあります。

ところで日本では江戸時代にこれを逆転させた、日本型の「華夷」意識が生まれ、それがアジア蔑視の歴史観につながっていきます。幕末にはこのような考え方と外国に対する危機意識が結びつき、朝鮮侵略論（征韓論）が生まれます。これが吉田松陰によって集大成され明治政府へと受け継がれていくことになるのです。

**植民地支配** 明治以降になりますと、朝鮮美化論の系譜 蔑視論の根拠に「近代化」が追加されます。さらにこれはロシア脅威論と結びつき、日本は朝鮮侵略・植民地支配への道を歩むことになります。そこではアジア蔑視観を、西洋から導入した近代学問が支える役割を果たします。

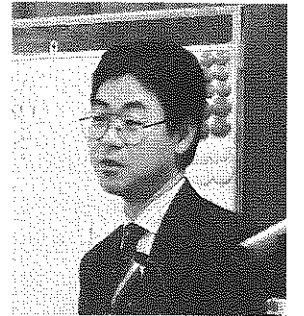
その代表的なものに、停滞論があります。経済の発展段階論にもとづいて、朝鮮や中国の社会は遅れているのだとする議論です。これは「近代化」を進めるためには、日本の「指導」が必要であるという、朝鮮支配を正当化する主張につながっていきます。のちの植民地支配を根拠づける出発点になるわけです。

そして植民地支配の時代には、朝鮮の「近代化」を自賛する議論が唱えられます。戦後も日本政府は、植民地支配は朝鮮の近代化に貢献したという意識をもっていました。日本と韓国との国交回復の話し合いの場、1953年の第3次日韓会談でも日本側代表がそのような趣旨の発言をし、交渉が決裂するということがありました。

**転換点としての教科書問題** 1950年代前半には、戦争責任の「ダブルスタンダード」が成立しました。日本政府は対外的には、日本に戦争責任はあるという態度を一応取るのですが、国内においては、戦争責任はないかのように振る舞うものです。具体的には、サンフランシスコ講和条約で戦争責任を認めているのに、教科書検定では「侵略」という語句をなくしていくわけです。

1970年代末あたりから日本社会の右傾化が強まり、教科書検定もますます厳しくなっています。ところが1982年に、日本の過去の戦争の

侵略性を薄めようとする教科書検定の結果が発表されると、中国や韓国から厳しい批判を浴び、教科書の内容の是正を求められるという、外交問題が発生しました。そのため日本国内においても、戦争責任を認めなければならない状況となりました。「ダブルスタンダード」は、もはや通用しない時代になったのです。



藤永 壯さん

**日本型歴史修正主義の登場** 現在の歴史認識論争の直接の契機として、1995年に発足した自由主義史観研究会の活動があります。中立を装いながら、実際には「大東亜戦争肯定史観」と何ら変わるところのない彼らの主張は戦争責任を認めず植民地統治を美化するものです。

またマンガ家の小林よしのりさんの『戦争論』が、今、大変売れているそうです。日本が引き起こしたアジア太平洋戦争を賛美する内容だろうと想像はしていたのですが、実際読んでみると、予想以上に他民族や外国を蔑み、侮辱する、排外意識・差別意識まじりの描き方に驚きました。戦争で日本人がいかに勇敢に戦ったかということを描く一方で、戦った相手がいかにずる賢く、謀略にたけ、残酷であったかということ、うんざりするほど強調するような内容なのです。

現在のこのような風潮の奥底には、日本人がいまだ清算できないでいる、朝鮮蔑視・アジア蔑視の歴史認識が横たわっているようです。このような認識が、歴史的にどのように形作られてきたのかを明らかにし、これを克服する道を探る必要があるでしょう。

(ふじなが・たけし 大阪産業大学助教授)

1999年3月7日 日韓の歴史を考える集い

文責：編集部

## 「イカイノ物語」を前に

マルセ太郎

昨年十月、六十四歳にして初めて母国を訪問した。ソウルで開かれた「国際演劇祭」に、招待公演として行って来たのである。その間の様子を、TBSテレビ「報道特集」で昨年十二月二十七日に放送されたから、観てくれた人もいるだろう。

ソウルのあと、亡き父母の故里である済州島に渡り、TBSが手配してくれて、知らずにいた親戚たちと会い、「ハンラ新報」主催による特別公演もしてきた。

九日間にわたる韓国滞在は、毎日が感激の日々だった。いま思い返して、あれは本当にあったことなんだろうかと、架空のこのように思える。それほど非日常的なことだった。ことに済州島でのこと。

父の故里は、漢東（ハンドン）里で親戚たち二十人余りが小型バスをチャーターして、会場のあるグランドホテルへやってきてくれた。その中の一人、八十四歳になる老女が僕のそばにきた。きくと、彼女だけが若い頃の父の顔を知っているのである。

父は僕が中学三年のとき、四十歳で死んでいく。生きていれば、現在九十三歳ということになる。僕は子どもの頃からよく、まわりの大人に、父にそっくりだといわれていた。

その老女はしわだらけの両手で僕の顔を扶み、さするようにしながら言ったのだ。

「アイゴー、アボンが顔だけ帰ってきた」

もちろん通訳で知ったのだが、アボンとは済州島の方言で、お父さんということである。

「アボンが顔だけ帰ってきた。」

如何なる劇作家がこんなセリフを書けようか。僕はここにきて、自分のルーツを探りあてた感がして泣いた。

ある日本の知人が言う。「朝鮮はアジアのラテンだ」と。

猪飼野もそうではないかと思う。あの混沌とした猥雑な町を、子どもの頃の僕は恥じた。大声でわめき合う無教養なチョーセン人を恥ずかしく思った。同時に日本人の、チョーセンという独特のイントネーションを憎んだ。

それが年と共に、また芸を通して、いまの僕は猪飼野をなつかしく思っている。あの中にこそ喜劇がある。愛憎入り混じったファミリーを愛しく思い、これを芝居にしようと考えた。

猪飼野の地名はいまはない。だから「イカイノ」と片仮名にする。これを書いている段階で、まだ一行も台本を書けないでいる。いつものこととはいいいながら、正直なところ不安である。

(まるせ・たろう ボードビリアン)

## イカイノ物語 公演スケジュール

東京 7/13(火)～18(日)東京芸術劇場小ホール

大阪 8/ 6(金)～ 7(土)近鉄小劇場

釜山 8/1(日) 名古屋 8/4(水)

京都 8/5(木) 広島 8/9(金)～10(土)

【問い合わせ先】マルセカンパニー 03-3430-7536

聖公会生野センターでも大阪公演のチケットを扱う予定です



マルセ太郎さん お忙しい中 直筆の原稿をお寄せ下さいました。ありがとうございます。(編集部)

## “民願申告”の時代

文京 洙

エイプリル・フール 4月1日、成田から釜山経由で済州に向かうKAL機がようやく飛び立った。もう午後の7時をまわっていて、予定より5時間遅れの離陸だった。勤め先での決まりや税制上のことから、済州での海外研究の期間は、形の上では1年365日を1日たりとも違（たが）えることが出来ない。だから、4月1日と来年の3月31日には、なにがなんでも、出入国にかかわる手続き上の痕跡を残さなければならないのである。実をいうと、すでに3月にはそこでの生活が半ば始まっていた。そういう意味で4月1日というのは、私にしてみれば、まさにエイプリル・フールにふさわしい詐欺めいた感じのする1日でもあった。

しかも、飛行機は遅れに遅れたうえに、釜山では天候が悪く、金海空港の上空を何度か旋回した末の着陸だった。軽い衝撃の後に飛行機が、無事、滑走路をすべり始めると、ばらばらとはあるが機内から拍手が起こるほどだった。おそらく、拍手をした乗客は、釜山で飛行機を降りる人たちだったろう。私も含めて済州島行の乗客は、もっと悪天候の予想される“風の島”までこのいかにも危なげな旅をつづけなければならなかった。とにかく、私が国立済州大学の宿舎にたどり着いた頃には、もう日付は変わっていた。

民願申告 飛行機が成田を飛び立ってまもなく、機内で二人の乗客が乗務員とのちょっとした押し問答のあげく、署名用紙をまわし始めた。飛行機の遅れへの抗議だという。この間、私はそんな光景に幾度か出会った。ソウルの東大門市場では、大店舗の進出に反対する小売業者の集会があり、道行く人に署名を募っていた。釜山でも済州島でも同じような光景があり、タクシーには運転手のマナーについての「民願申告書」が備えられていた。済州島のある友人は、日本から荷物が届かずうろたえていた私に、郵便局の「民願」係りへの「申告」を勧めた。新聞やテレビもこの「民願」

にまつわる出来事をたえまなく報じている。「民願」といえば穏やかに聞こえるが、事実上それは、日常生活にまつわる人々の「意義申し立て」にほかならない。しかも、そこにはお上の権威がまかり通った社会での「文化革命」といった様相がうかがえる。

四・三事件 そういう「異議申し立て」の機運は、四・三事件をめぐる済州島民の動きにも見られた。四・三の問題解決を公約に掲げた新政権ではあったが、この間、国会レベルでの「可視的成果」（当地ではこの言葉がよく使われる）はほとんどなかった。4月3日の慰霊祭を中心とした51周年の一連の集会でもこれについての島民たちの抗議の気持ちが滲み出していた。2月に発足した道民連帯（済州四・三真相解明と名誉回復のための道民連帯）は、4月5日から国会への訪問団を大挙派遣して与野党から年内の国会特別委員会作りの言質を引き出している。これに参加したある友人は「場合によっては籠城だ」と息巻いた。

なにとはともあれ、この国は、新しい時代に向けて慌ただしく揺れ動いている。そして、そういう国での1年間の生活がこうして始まった。出だしからいろんな躓きがあり、お世辞にも幸先よいスタートとはいえない。しかし、強がりではなく一人暮らしの不都合には慣れている。仕事やテーマは山ほどあるが、とにかく、焦らず、力まず、この国を生きる人たちの願いや思いをあるがままに感じとっていききたい。

(むん・ぎょんす 立命館大学国際関係学部教授)

親交のある文京洙さんが1年間、済州大学に研究のため行かれました。文京洙さんは済州島出身の在日二世として、済州島に関する研究や活動を活発になさっています。韓国でも独特の風俗・習慣・歴史・文化を持つ「済州島」、マスコミや旅行ガイドブックではわからない「生き生き」としたレポートが一年間続きます。楽しみにして下さい。(光)

連載マンガ⑪

파란불 (青信号)



- ① ハエリン 赤の時はどうするようになってるの?
- ② こうして、渡るんですよ。
- ③ そうしたら死んでしまうよ。なぜ死ぬの?
- ④ 赤の時は車が通る信号だから、青の時に渡るもんだよ。
- ⑤ 青だから渡ろう



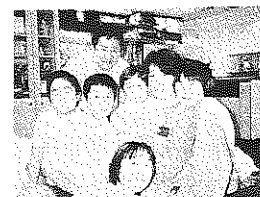
- ⑦ ふう、大変なことになるところだった。赤の時に渡るもんだね。
- ⑧ 違うよ、青の時に渡るもんだよ。
- ⑨ 青の時でも車が来るかをよく見て行かないとね。
- ⑩ ゴミ箱に捨てなさい。さあ、あそこに捨てて。
- ⑬ 違うよ、それは郵便ポストだよ。

作者：崔正鉉 (ちえ・じょんひょん)  
パンチョギ (もう一方) の愛称で親まれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。ユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995第1回平等夫婦賞受賞。

大阪考⑨

高二三

ダブルの新風 - 在日コリアンと日本人の結婚家族



山中修司・大嶋隆之・谷寛彦・金正坤 (新幹社刊、定価3000円+税)

この本は写真集である。新幹社が初めて作った写真集は、在日コリアンと日本人の結婚家族の日々の暮らしを淡々と撮った実に地味なものである。スターの写真集のような派手さもなく、テーマもそれほどセンセーショナルではない。人の日常生活は、写真集としてみるならば決して楽しいものではない。つまり「絵」にならないのである。

しかし、作ってみて気がついたのだが、在日コリアンの結婚の80%以上が日本人とのものになって久しいにもかかわらず、これら、「国際結婚」の問題に正面から向き合った本が少ないということである。なぜだろうか。在日コリアンの中にも、日本人の中にも、まだまだ「国際結婚」をタブー視する傾向が強いからであろうか。そんな状況の中、さらに在日コリアンと日本人がそれぞれの文化を背景にした価値観と価値観を衝突させて成り立つ結婚が一般には見えにくかったのだろう。しかし本書で取材された家族は、濃淡の違いこそあれ、互いの違いを尊重し、ぶつかりあい、そして一つの壁を克服したすがすがしさがあふれている。生半可な家族の結束力では、この日本社会においては「国際結婚」なんか軽く吹き飛ばされてしまうのだろう。

本書と「大阪」ということでいえば、大阪にかかわり合う数家族が紹介されている。さりげない大阪の町の風景を見ると、ここで暮らす在日コリアンと日本人の生活臭が漂ってくる。

そもそも男と女の愛のかたちなんて理屈じゃな

い。だがそれでもなぜだか、在日コリアンの場合には「理屈」が先立ってしまうのが現実だ。虐げられ続けて来たからなのだろうか。虐げる側の「論理」にくみしたくないと思うからなのだろうか。私にはその点、大阪人は「論理的」というよりは「身体的」に思える。「理屈」で考えるよりは既成事実の方が先に積み重ねられてしまう在日の現状をもっとも反映しているのも大阪の在日コリアンをとるまく世界だと思っている。

生野に育った在日三世が言う。「知り合うの(同胞)は全部友達ですわね。…彼女となると別ですから…」。「国際結婚ということ意識する前に、自分が韓国人と意識することが、一日何回あるか。」フム、フム、と聞く。これが現実なのかもしれない。

ある夫婦は、ふとんを柄を表にしてしてたたむのか裏にしてたたむのかでちがいを感じ、ある夫婦は宗教観のちがいが国籍のちがいより克服しがたかったと言う。すべて自分たちの体験からの声なので、たとえ表現はつたなくともリアリティーがある。

夫婦二人だけから、家族が増え、地域社会の関係がさらに密接になっていく。するとおのずと地域社会との関係も複雑にならざるをえない。その分苦悩も深くならざるをえない。今日もまた数多の「国際結婚」のカップルが生まれている。それは、単に価値観の違いを克服するというだけでなく、新しい価値観を想像する試みとしてある。しかし、日常の闘いに疲れ、破れることもあるだろう。それら全部をひっくりめ、応援したいという気持ちが私の中に生まれているのは歳をとったせいなのだろうか。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

『ダブルの新風-在日コリアンと日本人の結婚家族』は聖公会生野センターでも取り扱っています。



## 寄附・献金ありがとうございます

1998年4月1日～1999年3月31日（五十音順・敬称略）

複数回献金して下さった方が多くいらっしゃいますが、紙面の都合上後援会・クリスマス献金・一般献金のそれぞれ一度の掲載にさせていただきました。またここに名前のない方もたくさんいらっしゃいます。各教会・教区・団体などで、取りまとめて下さった方々です。その方々にもここで感謝の意を表したいと思います。ご支援ありがとうございます。

### 後援会（個人）

相原太郎 相原吉男 青柳美智子 秋山義孝 東敏勝 東直子 尼子美喜 天野雪子 天野由美 有村一夫 李昌雨 飯島正 飯田修 石井宏 石井義雄 泉迪子 泉田恵美 伊勢田健 磯晴久 一花恭子 井原洋子 今井雅雄 今北富三 今中富美子 今中喜子 今西政弘・時子 林芳子 岩垂悦子 植田哲子 植松從爾 植松誠 宇野容子 大音智恵子 大方豊 大川千萬 大黒清一 大嶋果織 太田喜元 大谷タカコ 大西純 大野寿美 大野和香子 大野和哥子 大橋襄 岡野利治 岡本勝 奥康功 奥田哲夫 小倉眞市 小野晶子 小野綾子 小野田芳大 香川一憲 景山恭子 笠原都由子 梶原史朗 片山春美 金宮春子 金光秀晃 叶信治 加納実 川上竹治 川村直子 姜富三 木川田一郎 木田江悦子 北山和民 金秀吉 金秀男 金聖次 金必順 鬼本照男 久保道則 久保淵豊彦 倉本和 栗山義信 玄後市四郎 小泉雅紀 高正子 河野裕道 越賀智恵子 越山健蔵 後藤一郎 後藤真 小西正人 小林克則 小林幸子 小林尚明 小林満寿子 小堀孝子 小堀肇 小松幸男 小室一 齊藤壹・祥子 坂本春夫 桜井揚子 佐治孝典 佐竹純子 佐藤悦子 佐藤時彦 佐藤信行 佐野信三 鮫島留美 佐山みち江 猿橋靖・正子 志賀成全 島田麗子 城下彰 代谷宣子 菅田睦子 菅原与志一 杉原達 鈴木慰 鈴木靖夫 関戸隆 高田茂登子 鷹見作平 高見澤國子 高宮建治 瀧山恒雄 武市温子 竹林徑一 田中恒久 谷富夫 谷井尚子 谷元郁子 崔京順 崔吉子 近澤淑子 張東煥 塚田理 筑田克夫 辻本敏子 辻本秀子 恒光兼介 恒光昌彦 富満美佐子 豊田英子 名出望 内藤昇 中川正信 永嶋大典 中島路可 中西久忍夫 中野香津子 中原恵 仲村實明 中村大蔵 新村隆一 西岡研介 西田眞哉 西村逸郎 直川義人 野村潔 橋本宣子 橋本禮子 畑野栄一 咸仁公 早

川善樹 春名英夫 坂東長輝 東峰多寿 飛田雄一 平賀てる子 平野敏郎 広木佐代子 黄裕錫・金幸子 福田光宏 福田稔 藤谷正一 藤永壮 藤原紘子 船木律子 古本純一郎 裘薫 芳我秀一 細井三郎 堀江彰夫 前島素子 前田圭子 前田忠男 前田都 牧口一二 牧野道信 益海政一 松居勲 松岡慶一 松岡寿子 松崎純二 松本一郎 松本文 松本正俊 真鍋倫子 真庭功 三木メイ 水谷博彦 水波淳 水口正樹 宮嶋公恵 宮嶋眞 宮嶋泰夫 武藤六治 宗像和雄・千代子 邑上亨 森英雄・貞子 森美知 森田斉子 森中央 諸橋保夫 八尾恵三 山口佐栄子 山崎ホシ子 山下秀 山根由香 山野繁子 山本勝彦 山本眞 山本眞美子 梁淑子 兪澄子 尹文嬉 吉田アサ子 吉田常夫 吉田雄亮 吉本恵一 渡辺定夫

### 後援会（団体）

アトリエIK ㈱アルテックス 生野センター横浜教区友の会 大磯聖ステパノ礼拝堂 大阪教区婦人会 大阪聖アンデレ教会婦人会 大阪聖パウロ教会婦人会 大阪聖パウロ教会有志の会 小田原聖十字教会婦人会 軽井沢ショー記念礼拝堂 北関東教区宣教部 京都教区教務所 京都聖マリア教会 神戸聖ミカエル教会 こひつじ乳児保育園 堺聖テモテ教会 三光塾 聖バルナバ病院サマリア会 旅路の里 東京教区 特別養護老人ホームふれ愛の家 富田林聖アグネス教会婦人会 名古屋学生青年センター 名古屋聖マルコ教会 西宮聖ペテロ教会 西宮聖ペテロ教会婦人会 博愛社 福岡教会婦人会 ぺんぎんぱり館 ㈱マイチケット

### 一般献金（個人）

穂原三千 梅本百合子 大川千萬 岡嶋彦一 岡野利治 岡本勝 金光秀晃 菊地泰次 金興一 越賀智恵子 桜井揚子 浜川良子 須佐美浩一 鈴木靖夫 園

部勝 空信一 高橋基子 瀧山恒雄 竹中達吾 谷昌二 利川良一 豊田英子 中芝永次 中西久忍夫 中野ノブエ 二條紀彦 早川善樹 堀田とし子 松戸聖パウロ教会有志 松本文 森美知 柳原一男 湯田千秋

### 一般献金（団体）

浅草聖ヨハネ教会 大阪聖愛教会 京都教区 京都教区京都伝道区信徒伝道協議会 下鴨幼稚園 聖社連第42回大会信施金 東光学園 橋本基督教会 松戸聖パウロ教会 水戸聖ステパノ教会 守口復活教会 山形聖ペテロ教会 立教女学院

### クリスマス献金（個人）

東直子 有村一夫 飯島正 石橋市子 泉迪子 今北富三 今中喜子 岩垂悦子 上本理世 宇野徹 大音智恵子 大川千萬 大段紀代子 大段るみ子 岡野利治 奥康功 奥田壮一郎 小倉眞市 小野綾子 榎田明子 金光秀晃 加納実 川上竹治 康愛子 姜富三 木川田一郎 北山和民 金秀吉 久保道則 栗山義信 河野裕道 越賀智恵子 小室一 佐治孝典 島田麗子 城下彰 代谷宣子 杉本美津子 鈴木慰 鈴木眞喜子 空信一 高橋敏子 高橋基子 高見澤國子 高宮建治 瀧山恒雄 武市温子 谷井尚子 谷元郁子 茶本博史 張東煥 辻本敏子 藤間孝子 豊田英子 中野ノブエ 新村隆一 二條紀彦 畑野栄一 早川善樹 春名英夫 平野淳子 黄裕錫・金幸子 吹留辰雄 芳我秀一 堀貴美子 堀武 堀江育夫 前島素子 前田圭子 前田

忠男 益海政一 松居勲 松本一郎 真鍋倫子 宮嶋泰夫 宗像和雄・千代子 森田斉子 森中央 八尾恵三 山口佐栄子 山口光 山崎ホシ子 山田護 山根由香 山本登 横山美樹 吉田常夫 若浪淳子

### クリスマス献金（団体）

愛楽園祈りの家教会 池袋聖公会 石橋聖トマス教会 伊豆聖マリヤ教会 市川聖マリヤ教会 一宮聖光教会 恵我之荘聖マタイ教会 援助マリヤ修道会 大阪聖愛教会 葛飾茨十字教会 金沢聖ヨハネ教会 九州教区婦人会 京都復活教会 清里聖アンデレ教会婦人会 甲府聖オーガスチン教会 神戸聖ミカエル教会 三光塾 三条聖母マリヤ教会 静岡聖ペテロ教会日曜学校 新宗連大阪事務所 逗子聖ペテロ教会 聖アグネス教会 聖アンデレ保育園 聖心幼稚園 聖パウロ教会 聖バルナバ病院サマリア会 聖ヒルダ礼拝堂 田辺聖公会 千葉復活教会 東京聖テモテ教会奉仕会 徳島インマヌエル教会 特別養護老人ホームふれ愛の家 特別養護老人ホーム神愛会愛の園シオン会 富山聖マリヤ教会 豊橋昇天教会 名古屋聖ステパノ教会 名古屋聖マルコ教会 ナザレ幼稚園 奈良基督教会 新潟聖パウロ教会野の花会 橋本基督教会 プール学院 中・高宗教部 福岡教会婦人会 平安女学院短期大学 キリスト教センター 松戸聖パウロ教会 水戸聖ステパノ教会 八木基督教会 八代学院チャペル委員会 八日市場聖三一教会 横浜聖クリストファー教会 横浜山手聖公会 立教小学校 良善幼稚園

## やりました。こみち寄席！休まず続けて40回！



第40回記念南京玉すだれ

聖公会生野センターが開設された当初からの定期プログラムのこみち寄席。年6回、奇数月。とうとう40回を迎えました。記念に南京玉すだれ（写真）の特別にやってもらいました。なんといっても「継続は力なり」。観客が10人そこその時もあったけど、楽しみにしている固定客の方もだんだん増えてきました。下駄履きで近所の方がセンターを訪れる、そんな大事なプログラムです。次は50回目（2000年11月の予定）。あっと驚かせる楽しいことをしたいと思っています。乞う、期待！

## 後援会会員入会・献金のお願ひ

聖公会生野センターが開設されてはや8年目を迎えました。この間、生野地域を中心として様々な人が集う事のできる場を作ってきたという自負があります。そして、昨年からは専従スタッフが2人になりました。それは聖公会生野センターの活動の拡がり、専従一人体制では求められる活動が十全におこなえず、より活発な働きのためにした決断でありました。

ある方は「聖公会生野センターの働きは日本聖公会に対する新しいチャレンジである」とおっしゃって下さいました。聖公会生野センターの働きがこれまであまり顧みられなかった視点、つまり「与える者と、与えられる者」との関係ではなく、「一人一人が共に担っていく」視点からなされていることへの評価であり激励であると受け止めています。私たちスタッフはこれに応えるべく「何が求められているのか？」を「私たちがしたいことではなく、地域が求めていること」にこだわりながら働いています。

しかし、財政はこのページの報告にあるように非常に厳しい状況です。ありがたいことに昨年はある方から多額の献金があり、且つ、出費をできるだけ押さえて予算よりもセンター資金の取り崩しが少なくて済みました。しかし今年度の予算もセンター資金の取り崩しを前提に組まざるを得ない状況です。大阪教区後援会発足など後援会活動の活性化、収入につながるプログラムの開発等、収入の増加にむけて努力していますが、なんとと言っても一人一人のご支援とご協力が聖公会生野センターを支える原動力になります。何卒、今一度皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

### ■余韻

パソコン通信で、韓国、北朝鮮・在日の情報を得ている。しかし、「自由」な論議という“大義”の下に、人権を侵害したり、あまりにも歴史の歪曲があからさまな発言にお目にかかることも……。まだまだ「パソコン」は未熟なメディアかなと思ったりするこの頃です。(ピックアンチャ)

## 聖公会生野センター会計報告

決算：1998/4/1～1999/3/31

予算：1999/4/1～2000/3/31

収入の部	1998決算	1999予算
分担金	2,640,000	2,140,000
後援会	3,301,046	4,600,000
寄附献金	1,406,462	1,200,000
クリスマス献金	951,875	1,000,000
3.1 信施金	2,000,000	2,000,000
プログラム収入	2,273,829	1,900,000
その他収入	121,246	0
小計	12,694,458	12,840,000
センター資金取崩	2,853,623	2,800,000
合計	15,557,081	15,640,000
支出の部	1998決算	1999予算
活動費	3,543,922	3,000,000
事務所経費	3,914,212	4,240,000
人件費	7,325,970	7,600,000
通信費	772,907	800,000
合計	15,557,081	15,640,000

### ◇後援会費

年額 1口 3,000円(個人) 1口 10,000円(団体)

・郵便振込00960-0-133429

「聖公会生野センター後援会」

### ◇自由献金

・郵便振込 00910-1-321780

「聖公会生野センター」

・銀行振込 三和銀行 東大阪支店

普通預金 3711311

「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail:cyj02040@nifty.ne.jp

発行人：木村 幸夫

編集人：大橋 襄